○Paul Hazard: La crise de conscience européenne (1680—1715) 3 vols. Paris. 1935.

勿論單なる年代的類同のみでは無意味ではあるが、世紀の終り(fin de siècle)には何かしら異常な感覺がある。十九世紀のみでない。例をフランスにとつてみよう。十八世紀に大革命、十七世紀の終りには歐洲意識の危機。

コレージュ・ド・フランスのポール・アザール教授が頗る魅力的な表題を掲げて考察せんとするのは、この十七世紀と十八世紀との過渡期の思想の全領域にわたつてゞあり、十七世紀—ボシュエ思想より、十八世紀—ヴォルテール思想への推移を純粹に思想史的に究明せんとするにある。そして實に鮮かにこの二つの思想が相對立して豫め定義せられてゐる。

「なんといふ對照であらう！ なんといふ亂暴な移行であらう！ 體統(イエラルシー)・秩序・ドグマ、これこそ十七世紀人の愛好したものなのである。拘束・權威・ドグマ、それはその子十八世紀人の嫌忌したものなのである。前者は基督者であり、神權を信じ、不平等の社會に甘んずる。後者は異端者であり、自然權を奉じ、平等を主張する。……これは一つの革命である。」(序文)

「嘗つては、ひとは十七世紀を大いに研究した。今日では十八世紀を大いに研究してゐる。がその境には、未だ不確な地帶が横たはつてゐる。」そしてこの時期こそ古きものが破られ、新らしきものが生れ出でんとする謂はゞ分娩の苦痛時であり、思想母胎の危機を含んでゐる期間なのである。

スピノザ、マルブランシュ、フォントネル、ロック、ライプニッツ、ボシュエ、フェヌロン、ベール等、更にデカルトの影を追ふ人々を著者はこの時期に配する。これらの人々はいづれも傳統を攻擊し、權威を否定せんとする。合理性が、そして人間のみが萬物の尺度であり、大膽な批判の規準なのである。神權のない政治、神祕を含まざる宗教、ドグマをもたざるモラルの建設が、いはゞ人間の幸福のため、その榮譽のため、未來の至福のために世界の再建が要求される。そしてアザール教授のいふこの十八世紀精神は既に早くルイ十四世の盛期に、一七八九年の革命精神が既に一六八〇年頃にみられる。かくてこゝに歐洲意識の危機が初まるのである。

著者アザール教授と共に、この危機の進展の跡を急いで辿つて行かう。

〔第一部〕 古典主義は恒常安定を好む。現實はしかし靜より動へ變化せんとする。歐洲及び遠隔地への旅行の流行は之の傾向に拍車をかける。そこに文化社會への批判が生れる。他方、古代の尊重は現在の確化諷歌と烈しき論爭を行ふ。史料批判が學者の手でなされてゐる一方、過去への信賴の喪失は歴史の懷疑論へ導く。地域的には知的優越はラテン勢力より失墜する。即ち南歐より北歐へ、英國、ドイツ、特にオランダが有力な智的活動の舞臺となる。そしてこれは又同時に舊教に對して新教の、正統(オルトドクス)に對して異端(エテロドクス)の勝利と照應する。この大なる心理的變化を最もよく具現したのが

ピエール・ベールである。古典の休戰が破れ、傳統的信仰への鬪爭が初まる。

〔第二部〕之の傳統的信仰への宣戰は「理性」を掲げる人々によつて行はれた。彗星に就いて、託宣に對して、魔法使に關する迷信へ、の攻擊から、奇蹟の否定が、啓蒙への努力が爲された。リシャール・シモンとその聖書批判はボシュエを中心に囂々たる論戰を惹起した。ライプニッツの新舊兩教の統一計劃は失敗はしたが、理性主義者達は破壞から建設への事業に從つてゐた。

〔第三部〕ジョン・ロックの經驗論が此の再建の礎石となつた。デイスム及自然宗教の成立はその自然法思想と密接に結びつく。そして自然法概念こそ新らしき哲人達が、古き神への義務に代つて主張する人間の權利なのであつた。グロティウス、スピノザ、プッフェエンドルフ、カンバランド、フェヌロン等々の手によつて、更にナント勅命の廢止と英國の革命はこの自然權の强化に貢獻した。宗教と分離した道德は地上の幸福を追求する。科學とその進歩とがその道をさし示してゐる、斯くして新らしき型の人間性、貴族でなくして市民的な型が構成される。

〔第四部〕そのポエジイのない、散文の時期にも、生活の美化、人間の感傷性(センシビリテ)は胚胎してゐる。オペラが榮え、笑が氾濫する。同時に國民的な、民衆的な、本能的なものが、換言すればロマンテイクへの潮流が窺はれる。

我々は斯くて歐洲意識の危機を克服して來た。しかし、アザール教授の論述には尙可成りの危機を內在せしめてゐるやうに思はれる。古典時代の恒靜が單なる旅行者の見聞によつて動搖を來すものであらうか。過去への信賴の喪失のみで歷史への懷疑が生じるのであらうか。知的優越の移動は新舊兩教以外の原因に求むべきではないだらうか。等々。そして教授の危機の中核は確に、その對象とせる時期の歷史的意義の把握の弱小性に存する。もし文學史家たる教授にして、この點がより鮮明にされるならば、明知を以つて書かれ、豐富な、興味ある內容を有する八〇〇頁餘の大著は、この未開の時期の研究者に、より一層の光を與へる一大標識となるであらう。〔前川〕

彙報

○史學研究會

例會 十月三日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に於いて左の講演あり、閉會四時半頃。

一、北魏に於ける尙書の地位並に組織 內田吟風氏

北魏は皇始年間既に尙書を設け、政治機構の中樞としたが、夫は未だ部落制を多分に殘存してゐた北魏內の北族に甚だ不利で、遂に一時廢止された。然し九品中正制と吏部中心の官僚組織を好都合とする漢人門閥の力は北魏朝廷を動かし結局尙書省を復活せしめ、而も其機要・行政的地位は魏晉及南朝に比して遙に重要であつた。其組織に關しては魏書官氏志其他にも明記する處がない